

葡萄と煮物 保科 史歩 作

ほしな・しほ 本名・村上詩歩
(むらかみ・しほ)。2000年生まれ。明治大学情報コミュニケーション学部2年。横浜市港北区。

二日酔いで頭が痛い。二十四回目の誕生日は仕事の上司や数少ない同期に囲まれながら迎えられた。私に彼氏がないことが周知の事実となっている仕事場では、所属部署の部長が私の誕生日を祝おうと言った。前日の金曜日に飲み会を開いてくれた。学生の頃バイトをしていた通信社にそのまま就職し、当時働いていた部署にそのまま配属となった私を上司のおじさんたちは娘のように可愛がってくれた。働かなくてもいい、時にぶつぶつとくもなる温かい職場である。

年に一回の記念日も二十三日も越えてきたとすれば慣れたもので、特別感深いものでもなく、こつこつと安アパートで一人ゆっくり過ごすのも悪くないと思えた。2Lのスホーツ飲料をペットボトルから直飲みし、もうひと眠りしようかと思ったが、誕生日の午前中に必ず実家から送られてくる荷物を受け取るという任務があるため中途半端に寝ることも出来ず、お祝いのラインを送ってくれた大学時代の友人たちに返信をしていた。

「お疲れ様です。ありがとうございます。」
「お疲れ様です。」
インターフォンを鳴らすと同時に、宅配便のお兄さんが威勢の良い声で叫んだ。この瞬間にいつもオートロックのないアパートに一人だけで住んでいると、不感心してしまふ。秋を迎えかけたこの季節でも、半袖シャツの脇の辺りを濡らしたお兄さんを見ると、つい劣い言葉が口を衝いて出る。「お疲れ様です。ありがとうございます。」

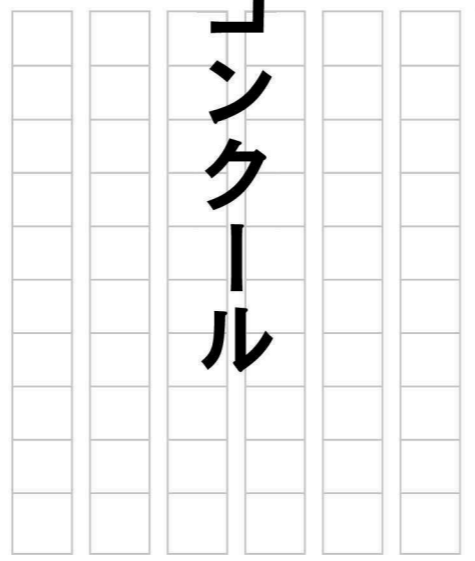
インクの薄くなったシャチハタで、苗字が斜めに傾いた印を押すお兄さんはもう一枚紙を取り出し、そちらにも印を押すよう促した。
「二つ、ですか。」
「はい。お荷物も二つ預かっているのです。」

「二つは実家からの段ボール。もう一つは赤いリボンのかかった白い立方体のプレゼントボックスです。荷物をリビングに運び、まずは段ボールの方から開けてください。カッターを探して。宅配のお兄さんは隣の部屋にも何か届け物をしているようで、また少し遠い所から威勢の良い声が聞こえてきた。隣の部屋は神経質な大学生が退去した空き部屋だった気がしたが、誰か住み始めたのだろうか。比較的住人同士の交流が多いアパートなので、顔を合わせたら、年齢の近い優しいタイプの女の子だったりする。できれば友達や恋人や人を連れ込まずに静かな方がいい。」

実家からの段ボールはシャインマスカットでいっぱいになってた。母は長野で生まれたせいかわ、葡萄が好きで昔からよく食べさせてくれた。それを私が好きだと言ったら、こつこつと丁寧に送ってくれた。シャインマスカットがどのくらい熟しているのか、艶々光る表面が目に眩しく感じた。その下には小さな箱と、服の紙袋が入っていた。この紙袋は父からの物だ。普段、自分では買わないようなワインテージもののジーンズと、海外のブランドのシャツが入っていた。服は好きだがそこまでお金

を掛けられない私にとって、いい歳をしてお洒落にこだわりの強い父のプレゼントは有力な助っ人になってくれる。満足にファッションにハンガーに吊るす私には、ローゼットを始めた。もう一つの小さな箱には、タイヤの付いたピアスが入っていた。二十歳を過ぎてからというもの、母は毎年自分のアクセサリーを一つずつくれる。どうしてこんな高価なものを毎年くれるのか、と気になって一回開いてみたところ、私が死んだあとあなたももう一つも遺品みたいに使ってほしいと、一番大切なアクセサリーが必要なのは若いときでしょ、なんて言ってきた。せつせつとした感じがよく、なんでもか、良々も悪々も母親らしい母親なのだ。後で二人にお礼の電話を入れよう。二日酔いでまだ少し頭痛を押さえないながら、マスカットを一粒もぎ、洗わないまま口に入れた。

第50回 神奈川新聞 文芸コンクール



作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。入選作は順次掲載します。

今回は11日の予定

朝方の夢 国広 知恵子 作

くにひろ・ちえこ 本名・国広知恵子(くにひろ・ちえこ)。1962年生まれ。会社員。横浜市港北区。

窓に当たる規則正しい雨粒の音に自分の鼓動を重ねようとしながら再び眠りに落ちる午前四時
伸びた雑草に隠れてしまっている錆びた鉄のフェンスが真っ直ぐに続くとどこか見たことがあるような景色の先にあつたのは遠い昔に住んでいた小さな家そこにはお姉さんのような綺麗な母とまだ青年の面影を残した若い若い父の姿が見える

今の私には手を差し伸べたくはない一人一人何を望む事が出来たのだろうか不安で心配な事ばかりの当時の私にすくく、ちゃんと生きてから安心してね、と言った十七才の私が泣いたような顔で笑った朝方の夢

講評

夢の中で、若かりし頃の両親と自分に遭遇する。過去の不穏な暮らしを想像させ、それを慰める現在の自分を語り、おのれの深層心理に向かってく深く深い目があつた。再び眠りに落ちるまでの、最初の描写もいい。(審査員・金井 雄二)

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

問題は送り主不明のプレゼントボックスである。中に爆弾でも仕掛けられているのだろうか、開ける有毒ガスを発生する仕掛けになっているのか、得体が知れなくてどこか気持ち悪い。なぜか元力したちから怨念に近い恨みを買っている私は、いつ殺されてもおかしくないかと常々考えていた。今日がその日なのだろうか。そうすると、恐ろしい事この上ない。意を決して軽く振ってみると中にも何が入っていないかのようになか、何の音もなかった。元力じゃなかったら、大して仲の良い友達の冷やかしか、嫌がらせの空想だろうか。それにしては、リボンが綺麗にまかれラッピングも凝っているようだった。

「なんだ。つまらない。」
何の写真かだけ見てやあつまらないか、と思いつた。一番上にあった写真を摘み上げた。その時、私は起きていながら夢を見るような感覚に襲われた。「お母さんが作ってくれた美味いよ。」誰かが私の名前を呼んでいる。お腹が空っぽな和食特有の匂いが漂ってくる。私が食べている煮物は、

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。



etsumi 画

「おんじくらの美味いよ。」
母に似ず料理が下手なせいで味には慣れない私に、人の料理を嬉しそうに食べている変わった夢だ。すべに意識は現実に戻された。私はただプレゼントボックスを前にして部屋に座り込んでいた。ささき摘み上げた写真は消えてしまっている。何が起きているのか分からないまま、私はもう一枚写真を手に取った。

講評

二十四歳の退屈な誕生日、語り手の「私」のもとに差出人不明のプレゼントが届く。不思議な光景があり、「私」が夢のように見える光景がある。ラストで、「私」の見た幻の正体が読み手にさりげなく知らされる。この二人を祝福した気持ちになって、好感の持てる作品だ。(審査員・角田 光代)